

”富士見市の昔話・その四”

『水車小屋の娘とお地蔵さん』

あまみ  
じょうらへん  
甘  
十楽



”富士見市の昔話・その四”

『水車小屋の娘とお地蔵さん』

あまみ  
じょうらへん  
甘  
十楽

♪お天道様が働いて

その汗<sup>あせ</sup>たまつて雨になり

お山の林が受けとめて

土にふくんで蓄えて

裾に泉を湧かせます

あふれる水はキラキラと

澄んで流れて集まって

やさしく水車を回します

米つき粉ひき休まずに

生活をうるおし毎日を

楽しく豊かにしてくれてます

お天道様、お水さんありがとうございます♪

コットン、トットン、コットン、トットン水車の音の間をぬって、母と娘の気持ちの良い歌声が聞えてきます。

きつと仕事をしながら歌っているでしょう。

しばらくすると、その水車小屋から、一人の可愛らしい娘が出て来ました。歌っていたお絹ちゃんです。七才になったので、おつ母の手伝いをして、搗いたお米の片付けや、頼みにやって来る村の衆への受け応えにも、はきはきと、

「有難うございます。またお願いします。」と笑顔で丁寧なので、評判も上々の娘です。

「お地藏さんに、ごあいさつしてこようつと」と、ひとり言のように云うと、川岸のまわりに咲いている菜の花を三ツ程摘みました。飛んでいたモンシロチョウが二匹寄って来て、摘んだ花にとまり、次にはお絹の髪後に結んだ赤い布にもとまりました。

「チョウチョウさん、ついて来てもいいけどこのお花はね、お地藏さんにお供えするのよ、それでもよければいっしょにいらつしゃい」そう云ってお絹は、川から離れてゆるやかな坂を少し登り始め、段々畑が始まるひとつめの畑の左の方の一角に、一本の櫨の木が繁り、その脇に、木の葉が日陰になるようにして、小さな四角つぼい石の上に、丸い石が乗せてあり、よく見ると、横に並んだ二ツのくぼみは目のように見える。これがお絹が、お父といっしょに去年作ったお地藏さんなのです。

お地藏さんの前にさしてある竹筒に、花を供えながら、お絹が

「チヨウチヨさん、お地藏さんはね、去年の夏の大雨の次の朝、川の上の方から沢山の石ころが流れて来ていてね、水車が止まってしまったことがあったの。それでお父が川に入って石を片付けているとね、水車の一番近くにひっかかっていたのが、手の平に丁度乗る可愛い丸い石で、二ツのくぼみが目のようだし、その下の横になった傷は口くちのようだし。」お絹来てごらん。“とお父が呼んでくれて、私に渡してくれたの。それで私”お父、大事にするからお地藏さんにして“と頼んだのよ。そしたらお父は段々畑の石積の中から丁度いい具合の長四角の石をさがしてくれて、その上にその丸い石を乗せて、この場所に置いてくれたの。だから私の一番大切な宝物だし、お友達なの。それでこうしてお花を供えてお話ししたり、お手玉をして見せたりして、いっしょに遊ぶの。チヨウチヨさんあなたもお地藏さんにとまってあ

げて、：：あーらきれい。チヨウチヨさんがとまると、お地藏さんのおつむが花かんざしを付けたみたい。」お絹は喜びました。  
しばらく遊んだチヨウチヨも、また川の方へ飛んで行こうとします。お絹は  
「また遊んでね」と手を振って見送りました。

何日かして、お父が

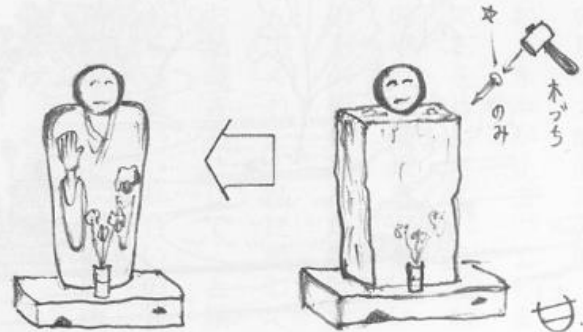
「水車の仕事も畑の仕事も、一寸ちよっと



手があいたから」と云つて、木槌と鉄の  
みを持つて来てお地藏さんの四角い石の  
方を打ち、角をけずつて肩を少し丸くし、  
その下の方を少し手の様な形にしてくれ  
ました。

「お父ありがとう。お地藏さん良かつ  
たね、お手てが付いたわね」お絹が云う  
と、お父はニコリとしながら小屋の方へ  
帰って行きました。

「ねッ、お地藏さん、お父つてすてき  
でしょ。お父つてかっこいいでしょ。あんまりしゃべらないけど、や  
さしくて思いやりがあつて働き者なのよ、だからおつ母が好きになつ



たんだつて、それに、お父が回る水車の軸と打つ杵、碾く臼、とのか  
み合せの具合を見たり工夫をこらしたりして水車をいたわつたり、お  
母の仕事がやり易いように気を配つたり、畑の方はほとんどお父一人  
で、雨の日も風の日も、朝早くから夕暮れまで、お天道様の時間に沿  
うように働いてくれる。だから私も、お絹お前も、こうして幸せに暮  
らして行けるのよつて、おつ母がいつも云つてるわ。それとねー、お  
父はお父で、ある時おつ母に「母屋で夜に目が覚めた時、川の字に寝  
ているおつ母が、大きくスーッ、スーッ、お絹が小さくスッ、スッと  
気持ち良さそうに寝息を発しているのが聞えて、ああ、俺を信頼して、  
安心して寝てくれているな、こんな家族を持って、男冥利につきると  
云うもんだ」つて云つたんだつて、こんなお父とおつ母の子供で私は  
ほんとうに幸せよ。お地藏さんはどう？私とお友達になれてうれしい、

幸せ？」

お絹が云い終ると

「ああ幸せだよ。お絹ちゃんが拾<sup>ひろ</sup>つてくれなければ、川下の深い所まで流されて泥<sup>どろ</sup>に埋<sup>く</sup>つてしまったかも知れないのに、こうして大事に、お花を飾<sup>か</sup>つてもらったり、お話しを聞かせてもらったり、こんな幸せな事はないよ」と云う声がありました。びっくりして廻<sup>まわ</sup>りを見ると、後に山の上のお寺の若和尚さんが、ニツコリしながら立っています。

「なーんだ若和尚さん、びっくりさせないで下さいよ」聞けば檀<sup>だんか</sup>家回りを終<sup>は</sup>つてお寺へ帰るところで、いつもお絹がお地藏さんと話しているのを見ていたので、今日はちよつと足を止めてみたんだと云う、そして

「お寺の庭に、坂上の方の子供達もよく遊びに来ているので、今度

お母さんといっしょに来てみないかい」と誘<sup>よ</sup>つてくれたのでした。

お絹は”どんな子供が来ているんだろう？”と思い、家へ帰つてから早速その話をお母にして、次の日にはいっしょに行つてみました。境内に入ると、天気も良いせいか、同じ位の年恰<sup>としかっこう</sup>好の男の子が三人、鞠<sup>まり</sup>を蹴<sup>け</sup>つて遊んでいます。その向うの本堂の回廊の所では、女の子が二人、お手玉をしていました。お絹とお母は「今日は」<sup>こんにち</sup>と声をかけて上がらせてもらうと、回廊の東には景色<sup>けしき</sup>が広がり、下の方の畑の間を川が流れているも見えます。

「おつ母、あの川は私の所の川の続きでしょうね」と聞けば

「そうなのよ、そしてその先まで下<sup>くだ</sup>つて行くと、さらに大きな川につながり、その川には江戸へ行く舟が通っているのよ」と教えてくれました。

「やあ、お絹ちゃん来ましたね」若和尚さんが出て来て、ニコニコしながら、

「お天氣の悪い日は本堂の中に入って、お経をまねしてみたり、いろはにほへと、と唱となえたり、おはじきをしたりして、皆んな仲良く遊んでいくんだよ。お母さんも心配ないから時々よこしなさいよ」と話してくれた。

それからというもの、お絹はお地藏さんに

「じゃあ、これから行って来ますからね、帰りにお友達になった子の名前も教えてあげるからね。さびしいかも知れないけど、我慢がまんして待つてね」と云つては、前を通り抜けて坂を登って五分程あるお寺へ、一人で行くようになりました。

今日は、本堂へあがつて、初めて筆を貸してもらい、紙にいろはを書かせてもらつたり、貝を丸くけづつたおはじきで、二ツづつの列れつを

作り、二ツ付ければ四ツに、三ツ付ければ六ツになる、ふのふでよ

ふのみでや、ふのよでや、ふのよでや、ふのよでや、ふのよでや、ふのよでや、と云う数え方かたまで教わつて、なんだかお姉さんになったようない気分になって、早くお地藏さんに教えてあげたくなり、「和尚さん、皆さん、さようなら、またあした」と云うと、いちもくさんに坂を駆け下りて、お地藏さんの所へ来ました。

「あーッ、お地藏さんが壊こわれてるッ」

お絹が目にしたのは、うしろに倒されてその向うに首が落ちている姿だったのです。ドツと瞳に涙があふれ、お絹は泣きながら、おつ母の居る水車小屋へ駆け込みました。

「おつ母、お地藏さんが大変なのよーッ」

とおつ母に抱きつきました。

「まあまあ、どうしたんでしょね。なにかがぶつかつたのかしらねえ、お父が帰って来たら、しっかり直なおしていただきましょね」と、

お絹の泣きじゃくりをおつ母が慰なぐさめている時、小屋の外で

「おつ母さん、おいですか？」と呼んでいる声がしました。おつ母が開けてみると、ここから三百メートル程、川上かわかみにあるお父やおつ母が”上の水車”と呼んでいる小屋のおつ母さんとその息子で、お絹より二ツ年上の平太君です。

母が「あれ、どうしなすつたの？」とおつ母が迎え入れると、上のおつ母が

「どうもこうも、今日はお詫わびに伺まつたんですよ。今ね、私が仕事をしていたら、小屋の外で平太達の”ヤッターツ、ヤッターツ”なんて声がして、ちよつと様子が変なので、出てみると、お友達三人と棒を振り上げ奇声をあげていたの。それで”平太どうしたの”と声をかけると、なんとなくバツの悪そうにしてお友達は分かれていき、そして

平太に”何かやったのね”と問とい質たしてみると、”虫とりの帰りにお絹ちゃんの大事にしているお地藏さんを、棒でつついて倒して来た”と云うの、何んでそんなことしたのと、よくよく聞いてみると”以前はよく、おつ母さんが家うちへ用があつて訪ねて来る時は必ずお絹ちゃんがいっしょに来て、平太とも仲良く遊んで帰ってくれていたのに、最近は来る事が少なくなつて、どうもお地藏さんと仲良くしてららしいと、ひそかにやきもちをやいていたらしいのよ、それでこんな事しちゃつたらしいの。段々年も増して遊びも違つてくるんだからと、よく云つて聞かせましたし、”もうしないよ”と云つてますんで、どうか許ゆるしてあげて下さいね。ほらお前もあやまんなさい”と上のおつ母さんは平太君の頭を押さえました。

「ごめんなさい、もうしません」平太もべこりと頭を下げました。

「あらあら、そうだったの。平太君はお絹の事、よく可愛がつてくれてたもんね。少しさびしがらせちゃったのかな、それでわざわざ来てくれたのね。ほらお絹、そういう事だから許してあげるでしょ」とおつ母が云ったので、お絹も、「わざわざあやまりに来てくれてありがとう、お地藏さんにもよく話して、お父に直してもらおうから、もういいのよ」とニコツとしました。おつ母が

「ああ、平太君、お絹はね最近和尚さんに誘われてお寺に遊びに行くようになったのよ。平太君には少し遠いけど年上だから歩くのは大丈夫でしょうから、行ってみたら、他の友達も来ていてお絹も楽しみにして行ってるわ」と教えてあげました。

帰って来たお父は、早速お地藏さんの身体を立て、首との間を石の粉と赤土を練ったもので、しっかりと固めて造り直してくれました。おつ母は赤いよだれかけを考え、お絹も縫い方を教わって手伝い作り

上げ、それを掛けてあげてうしろでしっかりと結ぶと可愛らしさが増しました。

その後、二日経って、平太もお友達をつれて、お寺へ顔を出すようになりました。

こうしてお地藏さんの首もしっかりつき、秋を迎えて、供える花もコスモスになったりしていました。

そしてその日は、昼から黒い雲がはびこり風も強く、夕方には雨ま

で降り出しました。  
「水かさも増し流れも早くなって来たな、こりやあ嵐になるな」とお父は云いながら、水車の軸から杵をはずし、カラ回りをさせて水車の負担を軽くさせました。お絹もおつ母を手伝って、搗いてる途中の米や、碾いてる粉を片付けて棚へ上げたりしてから母屋へ引き上げま



した。

「お絹は心配しないでおやすみなさい」と云われてふとんに入りましたが、お父やお母が

「水の勢いで水車が流されなきやいいがな」なんて話しているのが聞こえると恐くなったりしましたが、いつしか眠ってしまいました。

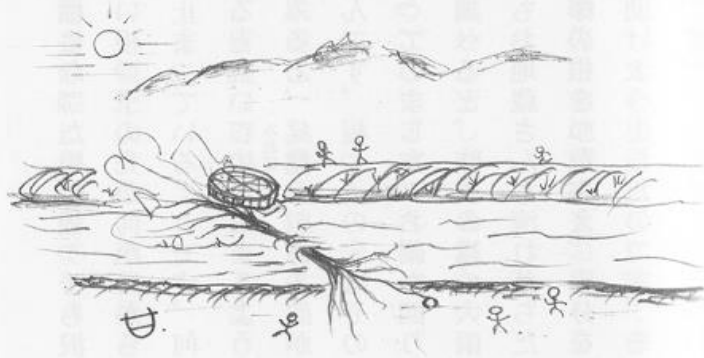
チウンチウンと雀の鳴く声で目を覚ましてみると、嵐は過ぎたようで、お天道様が東に登るところです。お父とお母は、もう水車小屋の方で点検をしています。お父が

「上の水車が流されて、家の水車にぶつかって、ほれッあそこまで行って止まったようだよ」と川下の方を指さしています。お母は、

「家の水車は少しまがっただけですんだけど、上の水車は大丈夫かしらね。お父行って見てあげて下さいね」といって「お絹も手をつな

いで行ってみるか」といってくれました。行ってみると、何人かの村の衆も兩岸から「よく止まったもんだ」と騒いでいます。お絹も岸辺からのぞくと、十メートル程の櫓が川に斜めに横倒しになって、それが堰になったようになって、その上を横にすべるように向う岸に、乗りあげられたように上の水車が横たわっています。上のお父も知らせを受けて青くなつて駆けつけて

「よかった、櫓のお蔭でここで止まったか、無くなつたら首つりもんだつた



よ。助かった」と涙をこぼしています。

お絹のお父がよく見ると、樗は根こそぎ横になつたので根っ子も沢山つけています。上流に向いている一番長い根っ子の先が何かにからまっている様子で、そのお蔭で流されずに止まっているようです。何にからまっているのかと、先の方をよく見ると丸い石にからまるように土に埋まっています。お父が少し掘ってみると、見覚えのある顔が出て来ました。そうです、お絹のお地蔵さんです。根っ子の先はそのよだれかけの結びにしっかりと、ひっかかっていた。お絹も回りの人達もびつくりしました。大人達がよく調べると、昨夜の嵐の大雨で山の地盤がゆるみ段々畑もくずれて、樗もお地蔵さんも流れ落ちたのでした。しかし、お地蔵さんはしっかりと樗の根をつかまえ、自分を土に埋めて、傘にもなってくれていた樗を助けようとしたのです。それが上の水車の流失をも防ぐ事になったのです。

村の衆も手伝つて、荷車二台に渡すように乗せて水車を上まで運び、お地蔵様も堀り返して、すっかり水で清めて、元の場所近くに建て直してくれました。上のおつ母と平太も、まっ先にお地蔵様をお詣りし、お花を飾り、平太は手を合せながら

「お地蔵様、前にはひどい事をしてすいませんでした。それなのにこんなに助けて頂いてほんとうに有難うございます」と云つて、涙を落しました。

いつしか、お絹のお地蔵様の事を、村の衆達は「お助け地蔵」と呼ぶようになり、通りかかる時は手を合わせ、皆んなで大切にするようになりました。

特に水車を営む家では守り神のように思い、似たようなお地蔵様を造つたりして、流されないよう高台にあるお寺の脇に置かせてもらい、お詣りするようになって行きました。

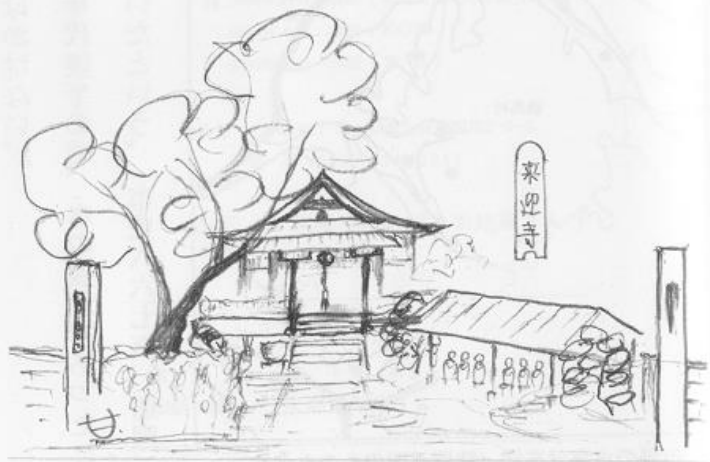
腕白<sup>わんぱく</sup>だった平太も、以来一生懸命お父の手助けをしたり、読み書き  
算術<sup>さんじゆつ</sup>にも精を出すようになり、人の役に立とうとする立派<sup>りっぱ</sup>な若者に育  
つて行きました。それで平太のお父が寄進したお地藏様の事は”子育  
て地藏”とも呼ばれたりしました。そんな事にあやかりたい、良い子  
に恵まれない、と願う他の親達もいて、時が経<sup>た</sup>つにつれ段々お地藏様  
の数も増<sup>ふ</sup>えて行つたようです。

そして皆んなの、お地藏<sup>うやま</sup>さんを敬<sup>た</sup>う心の故<sup>ため</sup>か、大きな嵐などが来る  
事もなく平穏な日々が続<sup>つ</sup>き、お絹も、思いやりのある、明るく美しい  
娘に、成長していった。と伝えられています。

終

【現在、鶴馬二丁目の御庵坂  
の上に来迎寺があり、門の脇に  
は沢山のお地藏様が祭られ、近  
所の人の信心を仰いでいる。

さらにこの来迎寺は、明治六  
年”必ず邑<sup>むら</sup>に不学の戸なく、家  
に不学の人なからしめん事を期  
す”として新学制が施<sup>し</sup>かれて、  
富士見市で最初の小学校”鶴馬  
学校”が置かれた所でもある。  
しかし、このお話しに由<sup>ゆ</sup>  
縁<sup>かり</sup>のある寺であるかどうかは、



昔話 「水車小屋の娘とお地蔵さん」

発行 2009年5月1日  
著者 甘十楽 (あまみ じゅうらく)  
印刷・製本 志賀堂印刷

※筆者の甘十楽氏の下承を得て  
同冊子をコピーして開示しております。



市域の水車分布図 (時期不明のものも含む)

読んだ貴方の推理におまかせするほかはない。  
また、江戸時代中期の一七〇〇年代後半の頃、水の豊かであったこの地には、七ヶ所で水車が働いていたという。(市史六六七頁、別図)